

愛河

Love River

台湾



台湾の河川は、一般的に急勾配で洪水時と渇水時の水量の差が大きく、また土砂の移動が激しいため、水生生物が生息できる環境が保たれにくいなどの特徴があります。このため、都市部の河川を除いては、これまで治水優先の河川整備が行われ、生物の生息・生育環境や景観に配慮した河川は多くありませんでした。しかし2005年に、河川生態の保全のために開発行為の禁止や水質浄化、河川公園整備のための新たな法制度が導入され、2006年には生物の生息・生育環境や良好な景観の保全、親水空間の確保、文化や歴史への配慮などの視点が加わり、河川再生に向けた取り組みが行われるようになりました。



台湾の第2の都市である高雄市には、全長約12kmの愛河という川が流れています。愛河という河川名は、1948年に設立された「愛河遊船所」という会社名の看板が台風によって壊れ、「愛河」の文字だけが残ったことがきっかけとなっています。



愛河かつての姿



汚染された愛河

愛河は、1960年代に工業の発展や人口増加等による汚染が深刻となり、その汚濁と悪臭から長く市民に背を向けられていました。1971年には「愛河の死」と発表されました。

1977年、高雄市と高雄県は「下水道整備計画」を策定し、愛河の水質改善の取組を始めました。その結果、水質は改善され、1987年頃には5、6種類の魚類が見られるようになり、その数は徐々に増加しました。2007年には50種以上の魚貝類が確認されています。

その後、景観の改善のための整備が始まりました。愛河に架かる橋のライトアップや親水公園が計画され、水辺に沿って遊歩道や街路樹も整備されました。

愛河は、川とまちのつながりに焦点をあてた再生事業であり、下水道整備や橋梁のライトアップ、遊歩道の整備等の事業とあわせて確実な効果を生み出しました。水質が改善され、緑のある景観を有する再生後の愛河は、高雄市のシンボリック的存在となっています。現在では観光拠点にもなっており、観光船が行き交い、水辺は人々でにぎわっています。



再生後



現在の愛河の夜景



水辺の利用



愛河沿いのサイクリングロード